

[研究論文]

## 小原國芳「学校劇」のはじまり

# The Beginning of Kuniyoshi Obara's "School Theater"

法月敏彦

Toshihiko Norizuki

〈抄 録〉

「学校劇」の名付け親として著名な小原國芳の教育活動に関して、その学校劇という命名が行われた1919年2月11日に焦点を合わせて考察した。実践内容の実態、周囲の教師、小原國芳の芸術教育に関する理想、そして小原学校劇の本質を追究した。本稿は「全人教育」の成立説明にも関わる論文である。

キーワード：小原國芳、鯉坂國芳、広島高等師範学校附属小学校、学芸会、対話、唱歌劇、学校劇、全人教育

### Abstract

Regarding the educational activities of famous Dr. Kuniyoshi Obara as the godfather of "School Theater" in Japan, I focused on February 11, 1919 where the term school theater was used. The actual condition of practical content, surrounding teachers, Obara's ideals, on Art Education, and the essence of Obara's School Theater that was used. This paper is also relates to a description of the establishment of "Zenjin" Education.

Keywords: Kuniyoshi Obara, Kuniyoshi Ajisaka, affiliated elementary school of Hiroshima Advanced Teacher's School, school festival, dialogic play, school song play, school theater, "Zenjin" Education

## 1. はじめに

玉川学園創設者・「全人教育」提唱者小原國芳（1867～1977）の香川師範学校附属時代の教え子であり、牛込の成城学校（私立成城小学校）、砧の成城小学校で学校劇の創作と実践を推進した斎田喬（1895～1976）や内海繁太郎（1896～1966）等によれば、「学校劇」の「命名者」は、小原國芳（当

時は鯉坂國芳。以下「小原」と略称)である。それは、大正8年(1919)2月11日、広島高等師範学校附属小学校で開催された学芸大会の第2部における唱歌劇「天の岩戸」と唱歌劇「桃太郎の凱旋」に対する小原の命名であった。

そして、このことが直接的に後の「学校劇運動」というものに繋がっていったために、学校教育の現場に学校劇を取り入れた最初の教育者として小原の名が記され後世に伝えられることになった。また、牛込の成城学校における学校劇の教育実践や、小原が大正12年(1923)3月に『学校劇論』を上梓して学校における芸術教育の意義を説いたことも加わり、その後、学校劇という言葉が広まったので、「学校劇という呼称は、このとき(筆者注、1919年)から使われるようになったというのが定説」(富田博之『日本児童演劇史』p.134)であるという。

筆者は、以上のような学校劇という名称誕生の概略から、いくつかの疑問点を持つに至った。例えば、1919年の学芸会は具体的にどのような内容だったのか、そして、なぜ広島高等師範学校附属小学校赴任直後の小原が従来の「対話」や当日のプログラムに印刷された「唱歌劇」などに対して「学校劇」という呼称を考案するに至ったのか、などである。これらの疑問点の解決は、所謂「全人教育」の成立を考えるためにも有効な方法と考えられる。

これらの疑問を解くために、従来あまり精読されることの少なかったと思われる広島高等師範学校教育研究会編輯『学校教育』第69号など、1919年(1918年度)当時の記録を中心に学校劇のはじまりについて考察し、その本質を究明する。

## 2. 広島高等師範学校附属小学校における学芸会実践の概要

まず、小原が「学校劇」という名称を初めて用いた大正8年(1919)2月11日、つまり当時の紀元節(現在の建国記念の日に相当する)、広島高等師範学校附属小学校で開催された大日本帝国憲法発布30年奉祝、附属小学校学芸大会(以下「学芸会」と略称)の具体的な実践内容について、『学校教育』第69号pp. 59-92に記録された田上新吉ほかの教師による「学芸会各演技の解説」を拠り所にして概要をまとめておく。

### 2.1 学芸会のプログラム

羽陰生「学芸会の概況」に記録されたプログラムのほか、上述「学芸会各演技の解説」を参照してプログラムの概況をまとめると以下ようになる。「唱歌」などの記載は発表のジャンル区別であり、続いて演目、最後に出演生徒の学年が記されている。その後筆者の簡単な説明を( )内に記したが、台本や楽譜が『学校教育』第69号に収録されている場合は下線を付けて注記した。

#### 第1部

- |      |            |   |
|------|------------|---|
| 1、唱歌 | 「日本男児 進撃」  | 1部6年                                      |
| 2、対話 | 「学校遊び」     | 2部1年(1918年9月入学生。台本収録)                     |
| 3、唱歌 | 「村の鍛冶屋」    | 1部4年                                      |
| 4、対話 | 「猫と鼠」      | 3部1年(全3場。台本収録)                            |
| 5、理科 | 「電灯実験」     | 高男(場内を暗室にして、松明から電灯までの歴史を<br>演。全4パート。台本収録) |
| 6、図画 | 「梅に鶯、豊臣秀吉」 | 1部5年                                      |
| 7、唱歌 | 「梅に鶯、豊臣秀吉」 | 2部23年                                     |

8、対話	「少女のまごころ」	3部56年(南北戦争当時の北米。全5場。 <u>台本と挿絵収録</u> )
9、朗読	「鉢の木」	高女
10、対話唱歌	「狐と虎」	1部1年(「小学読本」から脚色した歌劇。 <u>台本と楽譜収録</u> )
11、黙話	「山内一豊」	2部45年(黙劇と幕陰からの朗読。 <u>台本収録</u> )
12、唱歌対話	「水師營の会見」	1部5年(実話の脚色。 <u>台本と脚色説明収録</u> )

## 第2部

1、唱歌劇	「天の岩戸」	高女(当日の「呼び物の一」)。 <u>台本・楽譜収録</u> )
2、(空白)	「問答ごっこ」	1部4年( <u>台本収録</u> )
3、唱歌	「梅、牛若丸」	3部1年
4、対話	「講和談判」	1部6年( <u>台本収録</u> )
5、書方		高女、高男、3部6年
6、唱歌対話	「白兎」	1部23年(天の岩戸と対照をなす出雲神話。 <u>台本収録</u> )
7、談話唱歌	「憲法発布」	3部56年、2部6年
8、対話	「鳥居勝商」	2部6年( <u>台本収録</u> )
9、手工	「桃太郎歓迎の旗」	2部34年
10、唱歌劇	「桃太郎の凱旋」	123部6年、高女

## 2.2 ささまざまな用語

この学芸会プログラムを見ると発表するジャンルに冠する名称に以下の区別が存在していることに気付く。すなわち、唱歌、対話、理科、図画、朗読、対話唱歌、黙話、唱歌対話、唱歌劇、書方、談話唱歌、手工である。これらは、1919年時点でおそらく一般的であった学芸会の用語と考えられる。また、教育成果を保護者に公開する意味合いが強いと考えられる理科、図書、書方、手工などは、今日の用語と大同小異であろう。唱歌を音楽に言い換えれば、現代の学校における教科名に通じている。

本稿に関係する用語である「学校劇」がこの範疇に含まれていないことに留意したい。後述するように、この特別な学芸会を運営した教師の間でも、使用する用語に異同が認められる。小原は学芸会を芸術的に仕組みたいという思いを込めて「学校劇」と呼び、小原の赴任前から学芸会で劇関係を担当していた音楽教師の山本壽は、浅草や千日前の歌劇と混同されない純正なものという思いを込めて「唱歌劇」と呼んでいる。この名称に関する考察は詳しく後述する。

また、上述の用語中、対話唱歌、唱歌対話、唱歌劇、談話唱歌の意味については、その正確な違いはよくわからないが、おそらく、台本構成上の「対話」つまり台詞による会話の挿入順序、あるいは、発表形式の規模などに由来しているのではないだろうか。つまり、「唱歌劇」つまり小原のいう「学校劇」は、対話を含む発表正式の中でも特に多数の学芸的要素、すなわち、背景(美術)、対話(演技)、独唱、舞踏(舞踊)、唱歌(合唱)などが総合的に含まれた規模の大きなものであったと考えられる。次に唱歌劇「天の岩戸」の内容を具体的に見ていこうと思う。

## 2.3 唱歌劇「天の岩戸」の内容

考察の方法としては、「学校劇」のはじまりとして周知されている演目である「天の岩戸」が、どのような内容のものであったのかについて、公表された台本そのものから行っていこうと思う。そのために、かなりの長文になるが、その台本を翻刻する。掲載されている『学校教育』第69号は復刻版も出版されていて、けっして稀覯本ではないだろうが、約100年前の印刷物は読みやすいものでは

なく、説明を補足して翻刻する必要があると考えたからである。

### 2.3.1 作者田上新吉の序文（翻刻）

『学校教育』第69号 pp. 59-61の台本の全文翻刻に際しては、旧仮名遣いは残したが漢字はすべて新字に改め、また、促音は小文字とし、繰り返し記号である踊り字は横書きの都合で再現できないので読みやすい形に改めた。

「唱歌劇 天の岩戸（高女一二三年）

**小序** 紀元節—建国創業といふやうなことに因んで一種の古代的な、そして神秘的な気分を現はそうと思って此の材料を選んだのである。この立場からして登場の人物（神々）にもそれぞれの仮装を施すことにした。

演技はすべて唱歌が中心になって進行して行くのであるが、唱歌で現はされない部分は朗読（祝詞）及び対話を以て之を補ふことにした。唱歌はなるべく之も古代的、神秘的、荘嚴といふやうなことを中心にしたいと思って、先づ山本助教授（筆者注、山本壽）の手を煩はして此の趣旨に適するやうな歌曲を選定して貰ひ、此の歌曲を本にして歌詞を創作することにした。—但し「岩戸びらき」の歌曲だけは在来刊行のものをそのまま用ひた—。

尚、演技に際しては全体の場面を暗室（筆者注、暗幕等で会場を暗くする）にして所謂天地晦暝の光景を現はし、二基の松火によって仄かなる明かりを点ずることにした。そして劇の進行につれては、白熱灯アーク灯の光線を利用して、所謂天地斬明の有様を現はすことにしたのである。

以上が此の劇を上場するに当たっての計画であったのであるが、何分にも脚本の創作、歌詞の創作、服装の調整、劇の練習といふやうな事を通じて僅々一週日の余裕しかなかったので、其の間に十分の考慮を費し洗練を施すことが出来なかったことを遺憾に思ふのである。

若しそれ演技の結果から見て、幾部分でもその目的が達せられたとするならば、それは主として演技の監督指導に任じて下さった鯨坂教諭（筆者注、小原國芳）、光線の投射に苦心して下さった中田教諭、背景の製作に尽力して下さった堀教諭古閑訓導、唱歌に全局を指揮進行させて下さった山本助教授、服装の調製及び舞踏の指導に骨折って下さった石田訓導、その他種々の助言を下された諸兄の賜である。竝に厚く感謝の意を表する次第である。（田上生）」

この序文によって私たちは次のような事実、すなわち、学校劇の歴史的記述の中で記されることの少なかった指導教員の役割分担を知るのである。（ ）内の人名は小原國芳『学校劇論』再版p. 69と筆者による補記である。

作、作詞（責任者、演出） 田上新吉（田上新吉、橋本留善）

演技 鯨坂教諭（小原國芳。舞台監督）

光線 中田教諭（中田栄太郎）

背景 堀教諭（堀孝雄）、古閑訓導（古閑停）

選曲、唱歌 山本助教授（山本壽）

服装、舞踏 石田訓導（石田ひろ）

小原が担当した「演技の監督指導」の具体的内容は不明であるが、おそらくは責任者であった国語教師田上新吉の右腕として生徒の直接指導に当たったのではないだろうか。これは、田上の序文でまず鯨坂教諭の名前をあげていることからの類推であるが、小原自身は『学校劇論』再版p. 69（選集版p. 273）で「不肖私が舞台監督の大役を自ら引き受けたものであった」と回想している。因みに、この

時期の「舞台監督」は今日でいう「演出」に近い概念であった。

### 2.3.2 天の岩戸（一幕）（翻刻）

次に台本全文を翻刻する。後半に収録されている4曲の楽譜は紙面の都合で割愛するが、その4曲とは次の通りである。「作歌」は作詞の意味である。表記は原文のまま。

「祈りの歌（Een alte Bar burvsre）」Silcher（田上新吉作歌）

「舞踏の歌（カドリール第4）」（田上新吉作歌）

「明けゆく光」ヤコーブスアルカレルト作曲（アヴェマリアの一部）（田上新吉作歌）

「岩戸開きの曲」統合女学唱歌第4巻より

「天の岩戸（一幕）

役割	天照皇大神	高女	森下芳子
	思金神	高二女	武田久子
	天細女神	高二女	栗島美津
	手力男神	高二女	吉川よし子
	天児屋根神	高一女	吹本重子
	布刀玉神	高一女	田中清子
	其他の神	(独唱) 高女	平田まき子
		(舞踏) 高三女	和田 操
		(同 ) 高二女	木岡 菊
		(同 ) 高二女	草野文子
		(同 ) 高二女	小坂勝子
		(焚火) 高二女	金尾美子
		(同 ) 高二女	大島静子
		(唱歌) 高一二女全	部

**背景** 正面には天の岩戸のかたく閉ざされたる光景。そこらの巖には青い苔などが一面に生へてみて岩皴ほの暗く、左手の方には高千穂の秀嶺が遙かに聳えて頂は茜の色に染まってゐる。一見太古の神境を想はしめるやうな場面である。

#### 梗概

幕の中から荘厳なる「祈りの歌」の合唱が起る。

天の岩戸に	日のみ神の	
かくろひましし	その日よりぞ	
世は鳥羽玉の	常闇とし	
なり了しぬる	いかがせまし	いかがせまし
あはれみ神よ	日のみ神よ	
吾等が願ぎこと	聞し召さし	
再び見よに	出でましつつ	
天地のかぎり	てらし給びね	照らし給びね

合唱の半ばに静かに幕が開かれる。

(岩戸の前には真榊に鏡と幣をかけたのが立てられて、尚台上に野菜、果物、鯛、鶏 神酒等が供へてある。左右二基の篝火は赤い焰をあげて物凄く四辺の闇を照らしてゐる。真榊を中心にして、左右にずらりと居並んだ群神は頭を垂れて祈りつつ「祈りの歌」を合唱して居る。)

唱歌の合唱が終ると、

(天兒屋根神が静かに座を立て、岩戸の前に進み、かしは手を打ってぬかづく、やがて次の祝詞を拝誦する。此の前後、居並ぶ一同の神々その場に於て礼拝する。)

#### 祝 詞

集待れる八百万の神達諸々聞召せと宣る。高天原に神留ります皇が親神漏岐神漏美の命以ちて天の安河原に神集ひに集ひ神謀りてここに天つ日のみ神と願ぎごと竟へ奉る。

天の岩戸に神隠ります日のみ神の太前に曰さく、日のみ神の神隠りに隠りまししより、天地の底つ極み、山河は色を失ひ、青雲は光り消ちつつ、万象は烏羽玉の闇につつまれて夜昼のけぢめも分かず、まがつみの醜の神々いやはびこりにはびこりて、国の人々あまた損はれつる程に、かけまくもあやにかしこき天つ日のみ神、天の岩戸を押し開き、天の八重雲を千別きて出でましつつ、天の下しろしめし給へと、鵜じもの頸根つきぬき、うづのみてぐら押し立てて、かしこみかしこみも白す。

祝詞が終つて天兒屋根神が座に復すると、

(思命神一同の神々に向つて)

『さてさて諸々の神達、誠にはや困つたことになってしまったのう。これまでお願いをしても日のみ神は御姿を見せ給はいで、此の高天原は言ふに及ばず、豊葦原の中つ国に至るまであれあの通り烏羽玉の真やみとなって、日の本の国はまるで常夜の国となってしまった。そればかりか、此のごろは千万のまがつ神は夜昼のけぢめもなく出あるいて、大切な国つ臣どもを害ふといふことぢや。いかが致したものであらう。』

(一同の神)

『誠に困つたことだのう。』

(思命神さらに言葉をついで)

『そこで吾が思ふに、此の天地をもとの明るさにかへすには、どうしても日のみ神に今一度出て頂くより外にすべはあるまいが、さてその日のみ神のお出ましを願ふについて、何かよい工夫はあるまいか。』

(群神は各首を傾けて黙考する。暫くあつて、)

(天細女神、面をあげて)

『されば私に一つの工夫がござりまする。諸々神達ちよとお耳を貸して下さりませ。』

(一同の群神、悉く天の細女神のところに首をあつめる。天の細女神はひそかに何事かをささやく。)

(群神一同異口同音に)

『なるほど、それは至極妙案と考へる。』

(思命神)

『では早選手配りをしてやることに致さうか。』

(群神一同)

『さうしよう、さうしよう。』

(神々一同、供物其の他を片づけて、何やかやと場所を整理し、白などを運び入れる。)

やがて、天細女神、片手に榊幣を携へて現はれ、正面に置かれた白の上に乗る。

滑稽な歌曲『舞踏の曲』の合唱が起る。

あっははははは　　わっははははは  
みやまの猿が　　踊って出たよ。  
さるよさるよ　　お前の顔は  
酒に酔うた　　里芋か  
猿よ猿よ　　ちよとちよ向いて  
ちよちよこ踊って　　見んさいな。  
あっちよちよいよ　　おっちよちよいよ  
おっとあぶない　　すってんころり  
あっははははは　　わっははははは  
小猿がとんと　　尻餅ついた。』

(筆者注、この二重鉤括弧は、メロディの区切りと思われる。以下同断)

猿よ猿よ　　お前の顔は  
菟蕪玉の　　味噌漬か  
さるよさるよ　　ちよとあち向いて  
ちよちよこ踊って　　見んさいな。  
あっちよちよいよ　　おっちよちよいよ  
おっとあぶない　　すってんころり  
あっははははは　　わっははははは  
小猿がまたも　　尻餅ついた。』

この歌曲につれて左右から神々が踊って出る。

(此の間一方からアーク灯の光線を、紫、赤、緑、黄等の色硝子を透して、舞踏の神々に投げかける。) 歌曲が終ると一同の神が手を叩いて笑ひどよめく。同時に鶏の変な鳴声が出る。一同の神々更に笑ひ興ずる。

此の時、巖の中から一道の光りがパッと射して遠山の頂を染める。……(天照大神、岩戸の扉を細目にあけて外を覗きたまふこなし……)

唱歌『明けゆく光』の合唱起る。

見ませ 秀峰の 鶺鴒の色を  
九天 ややに あけゆくよ。』  
見ませ 秀峰の 紅の色を  
国内 ややに 明けゆくよ。』

(歌の間に天児屋根神、真榊を持って控へ、その枝にかけた鏡を大神の方にさし向ける。)

(天照大神鏡に映った御顔を見て驚き顔に出でたまふこなし…巖のかげに匿れてゐた手力男神がさかず大神の御手をとってお出しまゐらする。)

天照皇大神出御…此の時唱歌『明けゆく光』終る。天地がはじめて明るくなる。

(布刀玉神、直に七五三繩をとって岩戸の口に張り)

『ここから後には穢がござりまする。ささ前へお出でなされませ。』

大神は更に少しく前に進み出でたまふ。…天地がいよいよ明るくなる。

(一同群神、坐して)

『誠に有難うござりまする。』…(一同大神を礼拝する。)

(思金神群神一同に向って)

『吾等の願ぎごとが叶うて、此のやうな嬉しい事はない。諸々の神達、これから一しょに歌はうでは

ないか。』

(群神一同)

『それがよろしからう。』

神々起立。唱歌『岩戸開き』の曲起る。

集ひ集ひて 来ませり来ませり  
げに八百万の 国土の神々  
歌宴の声々 闇をば破りて  
山より谷へと ことへ響きぬ。』

(筆者注、この鉤括弧は、メロディの区切りと思われる。以下同断)

中にも優しき 細女の命は  
正木の若葉を かつらに頂き  
日かげのかつらを 襷にあやどり  
覆槽ふむ足どり とどろの足音。』

神々華々 笑らぎてわらへば  
岩戸を細目に 何事ならんと  
大神少しく 覗かせたまふ。

すかさずかけよる 剛気の手力。』  
岩戸ははなれて 天照る後光  
闇路にひらきし 瞳はまばゆく  
面々真白に 面白面白  
めでたしめでたし 世はまた昼とぞ。』

翻刻は以上である。

一見して理解されるのは、田上など国語教師の素晴らしい文章力ではないだろうか。内容はけっして現代の学校教育に通じるものではないと思うが、児童生徒が演じる一種のミュージカル台本として捉えた場合、あるいは、当時の歴史観を反映した歴史教育の教科書もしくは文芸教育という学科の劇化としての台本として考えた場合、分かりやすく、かなりレベルの高いものと思う。おそらく約100年前にこれを演じた生徒、指導した教師、鑑賞した人々は、歌詞の一言一言から多くのことを感得したと思われる。

### 3. 学芸会の伝統—小原國芳赴任前と赴任後の学芸会

この1919年2月11日の学芸会は、すでに述べたように帝国憲法発布30年の記念すべき紀元節の日で開催されたので規模の大きなものであった。それでは、例えば前年の学芸会は一体どのような内容のものであったのか。以下の引用は、『学校教育』第56号巻末の「附小職員室より」という短信に含まれている文章であり、すでに記した翌年のような特集の記事ではない。箇条書きのプログラムは、紙面の都合上、改行しない形式で翻刻した。

「○二月十一日は恒例により祝賀式後午後一時より第十三回児童学芸大会を開催し候。不相変満員にて狭き雨天体操場は文字通り立錐の余地なき有様にてそぞろに大なる講堂を持てる学校が羨しく相成申候。在にプログラムを御目に掛け候。



1唱歌「勸学」全体／2談話「楠木正行の母」2部4年／3対話「山のひとと島のひとと町のひと」2部1年／4算術「桃太郎」1部2年／5対話「鼠の智慧」3部1年／6図画「略画」1部4年／7暗誦「金剛山下の忠士」2部5年／8談話「氷河と氷山」2部高12男／9唱歌「お日様」1部1年／10談話「勇敢なるレビー嬢」3部4年／11家事「楽しき一日」2部高2女／12書方「皇威宣揚、国家発展等」1部5年／13朗読「あととり文句」1部3年／14対話「米艦の渡来」1部3年／15実験「音響」中田教諭／休憩／16対話「ユキダルマ」1部1年／17図画「風景」2部2年／18対話「人の情」3部34年／19談話「二十四孝絵ばなし」1部4年／20朗読図画「冬景色」3部6年／21理科実験「水素と酸素」1部6年／22談話「国家発展」1部5年／23談話書方図画唱歌「神武天皇」1部3年／24算数「暗算」2部34年／25図画「海辺の松」2部高12男／26談話「正直な丁稚」1部2年／27唱歌 甲「高嶺（三重唱）」乙「楽しき森」2部高女／28対話「古武士の意気」2部56年／29対話「浦島太郎」各学年

(『学校教育』第56号 pp. 87-88)

演目の数でいえば翌年の学芸会の22演目よりも多いが、おそらく一演目あたりの上演時間が短かったのであろう。また、特に「劇」という文字がプログラムに含まれていない点に留意したい。「唱歌劇」という言葉はまだ生まれていなかったのであるが、最後の演目「浦島太郎」には「唱歌と対話と背景と動作」が含まれており、総合された劇に近いものであった。因みに、翌年の演目に比べた場合、此の学芸会の演目は日常の学習成果を公表するという側面が強く感じられる。

また、この「附小職員室より」の著者であろうと思われる「稿生」（別の筆名として「稿堂」）の次の記述は、小原赴任前の学芸会に対する佐藤熊治郎主事（広島高等師範学校教授。附属小学校校長）の学芸会に対する「思い」を知る上で重要である。

「主事が「単に平素の学業の成績を父兄の面前に提供するの以外は学校の祭、児童の楽しみ日といふ意味を加へ野卑に陥らざる範圍に於て歌劇様のものも入れました。」と宣したる開会の辞は此処に至って完全に照応し一同に大なる満足を与へ申し候。」(『学校教育』第56号 p. 88)

「歌劇様のもの」とは、おそらく最後の演目「対話 浦島太郎」を指していると思われる。つまり小原赴任の直前から、学芸会に際して「劇」に近い発表形態を導入する新しい試みが行われていたのである。しかし、そういう試みに与えられるべき名称は、この時点では定まっていなかったといえる。

#### 4. 教師たちの「思い」

小原自身は、後に執筆した『学校劇論』再版pp. 69-70の中で、1919年2月11日開催の学芸会で「天の岩戸」などに冠する命名に苦勞した逸話を書き残している。興味深いのは「偶然、山本君と二人が宿を共にして居た。同じ悶えを身に持ちながら、学芸会の相談を深更までしたものであった。」というくだりである。この同じ下宿で、山本壽は「唱歌劇」という命名を發案し、小原は「学校劇」という命名に拘ったのである。結局、当日のプログラムには「唱歌劇」がプリントされた。

すでに述べたように、附属小学校主事佐藤熊治郎（1873～1948）は小原が赴任する前から学芸会の内容に劇を導入してその芸術性を高めたいという思いがあった。

以下、佐藤と山本の学芸会に対する「思い」、小原との異同、そして共通項をまとめておく。考察の対象となるのは、共に広島高等師範学校教育研究会編輯『学校教育』第69号の学芸大会特集号収録の論文である。

#### 4.1 佐藤熊治郎「学芸会に於ける愚見」

佐藤はまず、学芸会の意義そのものから問い始める。そして、学芸会の目的を「学業の奨励乃至は教育上の参考」を否定するものではないが、ドイツの教科書に書かれているシュールフェスト Schulfestつまり「学校祭」を仮借転用して「学芸会を以て一種の学校祭と見たいのである。子供の待ちこがれる楽しみの日と考へたい」という最初の自説に至る。

更に「何を以て芸術に対する子供の要求に応ずべきか」として人間の本质から湧き出る「真善美」の内に含まれる「美」の要求に応ずるのであるという。佐藤の理解する子供は「或意味に於て詩人であり画家であり作曲家であり俳優である」。これが子供本来の芸術美に対する要求であり、家庭と学校の任務は「子供の生活に現れる芸術的卵を孵化せしめて、之を清い純な芸術感に育て上げる」ことであるという。

そして、学芸会の意義とは結局、学業成績の発表などの科学的な「厳粛な気分」と、芸術的な「和楽の気分」の調和的プログラムにすべきであるという主張に至る。これによって「子供の待ちこがれる楽しみの日」が与えられるという。

また、「劇」に対する姿勢も大変に明瞭で、学芸会における劇の発表に伴う「弊害」に対しては断固として「我々は弊を恐れて利までも捨てやうとする因循姑息保守的退嬰的態度を取りたくはない。」と断言している。これは、演劇を含む芸術を学校教育から排除していく風潮に対する反論であり、後に小原を通じてさらに強化、敷衍されるシラーの遊戯する人間、エレン・ケイの児童の世紀の子供理解でもある。

この「愚見」は最後に、「子供時代の気分に立帰って彼等と共に謡ひ且つ舞ふて、不言の間に如何に真の美的享樂の美はしいものであるかを感じ得せしめる雅懐宏量を持たなければならない。」という学芸会の楽しみ方を示し、教育者を鼓舞する言葉で締め括られている。

読めば読むほど、小原が『学校劇論』に記した「佐藤主事の雅量を今に感謝にたえない」という言葉の内実が理解できるようである。なお、現在、玉川大学教育学術情報図書館には「佐藤文庫」があり、ドイツ語を中心とする佐藤の旧蔵書が収蔵されている。

#### 4.2 山本壽「唱歌劇について」

今でも広島大学教育学部で語り継がれる高名な音楽教育者の山本壽は、すでに述べたように短い広島勤務だった小原と同宿であったという。そして1919年の学芸会に際して「唱歌劇」という命名を行った。小原は『学校劇論』再版p. 70で「当日のプログラムに「唱歌劇」なる名がプリントされ、且つ今に（多分）広島高師ではその名の下に、劇集も出して居られることと思うが、それは山本君の発案であった」と述べている。また、「なるほど「唱歌」という名目は、よい感じを与える。学校という感じがする。汚らしい気がせない」としてこの名称を評価している。それは、おそらく小原が、山本の子供に接する教育者としての考え方に共通項を見出していたからであろう。勿論、音楽教育の専門家であり、以前から学芸会における劇導入の実務担当者でもあった山本にとって学芸会での命名は、小原が考えたように理論的に解決できるような問題ではなかったようである。

山本の「思い」は、おそらく次の言葉に集約できるのではないだろうか。「唱歌劇は彼の低級趣味を鼓吹する不純不正劣悪なる興行物と異り、純美、雅性にして新鮮、可憐、無邪気なるものよりも高尚優美なるもののみを選びて演ぜしめ、又鑑賞せしむるものである」。ここで山本の攻撃的となっているのは、おそらくその頃「歌劇」として一般に認識されていた浅草、大阪や広島の前千日前で興行されていた類のものであろう。このような「思い」は、日々唱歌を教えている山本が感じていた天真爛漫な子供の遊戯的本能、すなわち「殆んど本能的に身振り手真似をやって欣んでゐるのを目撃する」

という現実に由来するものである。

しかし山本は、すべての唱歌に劇的動作が伴うものではないともいい、冷静に歌の内容題材による分類を試みている。結論をいえば、叙景的な歌の場合に劇的動作を付けることは不自然であり、一方、叙事的な歌の場合は劇的動作を付けることができるという。したがって昔話や伝記などの叙事的唱歌に劇的動作を施せば、子供の心を浮き立たせ深い印象を与えることができると考えていたようである。

つまり学芸会における唱歌劇は、どんな題材にも適応できるものではないのであるが、もう一つの「重要な意義」を認めたいという。それは、「色々の教科を総合し統一」することができるということであり、山本が唱歌劇を試みた理由がそこにあったのである。

以上のような山本の「思い」もまた、佐藤の芸術性を重視する「思い」とともに小原に伝わっていったと考えられる。

## 5. 小原國芳の「思い」

小原が初めて「学校劇」という言葉を使って学芸会の教育的意義を説いたのは、1919年学芸会のおよそひと月後の3月1日に脱稿した論文、鯉坂國芳著「学校劇について」という小論であった。その主張は、「どこ迄も学芸会は芸術的に仕組みたい」「体育の為に運動会といふものが行はれているように、美育の為に芸術会としての学芸会があつて欲しい」として、さらに芸術教育の必要性、ひいては学校劇の必要性を六つの点から述べている。

「芸術教育の必要」の項では、江戸時代の芸術すなわち演劇、絵画、文芸などに対する偏見を指摘し、驚くべきことに「全人の教育といふ立場より見る時に甚だしく偏頗なものである」という説明を行っている。

「劇そのものについて一般に誤解している」では、総合芸術としての演劇を説明し、「真善美の三の価値が何れも聖といふ形を取り得るように、即科学哲学、道徳、芸術の極致はまた宗教となるように、劇そのものは実にすべての芸術を打って一丸としたものである」「芸術の頂点も劇である」といっている。これは、2月に発表した論文「教育の根本問題としての真善美聖」（『学校教育』第67号）から発展した理念であろう。

「児童の本性」では、児童の本性にある劇性、歌と踊りなどの連動を指摘している。

「高尚なる趣味」では、ノーブルなものを与えよといっている。

「芸術革命運動」では、観念上の誤解を解くためには学校劇として純粋な演劇を行うべきだという。

「家庭教育、父兄教育のためである」では、坪内逍遙ばりの家庭劇を推奨している。

そして最後に、弊害を恐れるな、「教育者の消極的な弱い意気地のない弱虫の態度」を改めよという。

これらの勇ましい主張は、4年後に上梓された『学校劇論』にも基本的には繋がっているが、東京で再会を果たした京都帝国大学の同級生松原寛(寛平)、牛込の成城学校で同僚となった飯塚友一郎など、芸術や演劇の専門家によってさまざまな意味で補強されていったのであろう。

結局、小原が学芸会の演目に「学校劇」という命名を行なった背景には、母校広島高等師範学校における佐藤、山本をはじめとする芸術教育に携わる良き理解者、教育実践者との協働作業を通してある程度の確信に至った小原自身の新しい教育理念すなわち後の全人教育への模索が存在していたと考えられる。

## 参考文献

- 佐藤熊治郎『教授方法の芸術的方向』目黒書店, 1921
- 田上新吉『生命の綴方教授』目黒書店, 1921
- 小原國芳『学校劇論』イデア書院, 1923
- （再版）小原國芳『学校劇論』玉川学園出版部, 1950
- （『小原國芳選集5』所収版）小原國芳『学校劇論』玉川大学出版部, 1980
- 内海繁太郎『学校劇の理論と実際』明治図書出版, 1950
- 小原國芳・小林健三『沢柳教育』玉川大学出版部, 1961
- 富田博之『日本児童演劇史』東京書籍, 1976
- 北島春信『成城・学校劇六十年』成城学園初等学校, 1977
- 岡田陽・岡田純子編『演劇と舞踊—玉川教育—』玉川大学出版部, 1964
- 岡田陽・落合聰三郎監修『玉川学校劇辞典』玉川大学出版部, 1984
- 岡田陽『ドラマと全人教育』玉川大学出版部, 1985
- 鯉坂國芳「教育の根本問題としての真善美聖」『学校教育』第67号, 広島高等師範学校教育研究会編輯, 1919年2月20日, pp. 118-127
- 佐藤熊治郎「学芸会に於ける愚見」『学校教育』第69号, 広島高等師範学校教育研究会編輯, 1919年4月1日, pp. 44-47
- 鯉坂國芳「学校劇について」同上, pp. 47-49
- 山本 壽「唱歌劇について」同上, pp. 50-54
- 白鳳生「学芸会に於ける背景」同上, pp. 54-55
- 羽陰生「学芸会概況」同上, pp. 56-58
- 田上生ほか「学芸会各演技の解説」同上, pp. 59-92
- 吉富功修「大正期の唱歌劇に関する研究（1）—広島高等師範学校附属小学校における山本壽と小原國芳による唱歌劇の創始に至る経緯を中心として—」『広島大学教育学部教科教育学科音楽教育学教室論集V』広島大学教育学部, 1993, pp. 1-16
- 三村真弓「大正期から昭和初期における広島高等師範学校 附属小学校に見られる音楽教育観 —山本壽を中心として—」『教育学研究紀要』中国四国教育学会, 第43巻第2部, 1998, pp. 217-276
- 升田真依子「山本壽の唱歌劇に関する研究」『音楽文化教育学研究紀要』広島大学大学院教育学研究科, XXVII, 2015, pp. 87-95